

短歌

感情 春秋

後藤 康信

ひらひらと若葉ひるがえる谷地には禽獸をこそ遊ばすべきか
夕映えの雲美しと讚ふなれ遲疑のならひぞすべなく今を
げんげ野の彩あでやかに巧めども鬱鬱としてわれは下らず
目に追ひて雲の行方を慕ふとも飛行を強る主観はあらず
いつしかと春の晩きにうつろふを嘆きともあらぬこゝろぐもりや
かゝるとき自己滅盡の理念あれ谷へ飄々とくだりてゆくか
落寞とおもひげさむき宵はさら哭かまく幸の一つだにあれよ
指弾あるそのときもそをあらしめよかくて育くむうるほひもあり
そこはかと秋深みゆく朝夕を何ぞ生きもののくりごと言ふを
彼岸花くれなゐふかく息づくや手脚繚戻の生命も通れ
期しがたき生命ぞとおもふ夕暮を何の暗示となづさふ雲か
秋深く夕庭にしてあるときはすさまじき勢のすぐるとすらし
かまつかの朱深うしていよいよに沈むいのちをむしろ泣かまし

綴方教室

秋の追憶

原田 見正

月のさえた静かな夜、澄んだ空は地上の
青白い光と和して冷たい感じを起させる。
晝間の様に明るい庭も冷たい空気に包まれ
てゐる。時折「キイー」といふ小鳥の鳴聲
があたりの静けさを破つて聞へる。裏山で
は枯葉が風の吹く度に「かさく」 「かさ
く」と音を立てながら散つてゐる。
山里の秋は寂しく吾々の心を深く考へさ
せる、しんみりと獨り考へると次々と想ひ
出多き過去がそれは笑となり涙となつて眼
の前に流れ出て来る。

一昨年の二月

「あゝ見えてもお母さんの病氣は大變悪い
んだよ……」醫者に胃痛と云はれたならそ
れは死を宣告されたのも同様である、現在

はやわれも一つの單位と散るべきぞ日夜ただならぬものどちら過ぐ

すさまじくあるべくぞして四邊には百花撩亂の嘆きあるなり

幾何いかにを今は富みたりと言ふべきか夕陽を没るる海にむきつつ

堪えがたくありどをおもふ日日にしてさるすべりの花は無爲に散りつぐ

注射器のただ一つをぞ持ちたえて生きながらふるいのちと言ふや

枯草に五體投げ伏してかくばかり似つかはしげに死にて居りたり

陸橋をわが渡るときいらいらと拳握こぶしらする錯覺さくごつがありき

柵しらみの人の世の變うつさもわかちあひて君とわがうへの秋深みゆく

河原邊

上田 一夫

たゝなはる層雲にしるく影を印し鳶輪を描く晝の河原邊

宵ぬちの街にしありて見上ぐれば望近き月照りてしづけき

朝の陽の竹群透きてゆるゝ光み寺の墓地に想念しづむ

故郷に歩み移して悲しむは昔に變らぬ山の色かも

山嶺の雲晴れゆけば岩肌のたちはだかるが現はれて來ぬ

蟋蟀を窓邊によりて聞きをればさびしらに浮ぶ父の面影

の醫學ではそれは殆んど不治の病とされてゐる。(今、母の病室を出て来て私が、思つたより元氣な姿を見て、この分では……と考へてゐた事も、この祖母の一言は餘りにも辛辣だつた。私は失望のどん底にたゞきつけられて、たゞ茫然として何事を語る勇氣もなかつた。

「きつと立派な者に成つてお母さんを喜ばせてやるのだ。」といふ様な事がある一つの望みともして一年前に母に別れを告げた私が今日この様に變り果てた母に逢はふとは……私は何とも云ひ知れない悲しみに胸がつまる様な思ひだつた。

祖母(母方の)はその十日程前静岡からわざわざ来て母代はりに色々家の中の面倒を見てゐて呉れた。私にとつてはいつもなつかしい祖母であつた、私が身延に學ぶと聞いて誰よりも一番よろこんで呉れたのもこの祖母であつた。その日も温顔に微笑を浮かべながらあたゝかく私を迎へて呉れたのだつた。

親が子を看るといふ事に對して不思議は

虫の聲聞きつゝあれば向つ峯に月は寂けく浮び出でたり

奉祝歌

田川惠良

神垣に御代安かれと祈るこそ我が國民の誠なりけれ

大君の御代をし禱る神桓や豊葦原は浦安の國

和みゆく日の御光を浴びつゝも興亞奉公日に汗を流せり

天地のみことかしくみ祈りけりさかゆる國の年な迎へて

淺月夜ほのかに香ふ梅園にひとりし佇てば心ふるへぬ

雜詠

鈴木美成

こぞ逝きし母を思へば薄野の露けきなかに虫の聲する

寂かなる麓路ゆけば山川の流れがくたく十五夜の月

端居して庭にむかへば草むらにとりどりに鳴く秋虫の聲

石切場に眞夏目てれば繋つかふゆゝしき肩の肉付きを見つ

すだれ取る秋も來にけりこの年も無爲に過しと思ふ我かも

ないけれど、今、年老いた母親は何人かの子の母であるところのその子の爲にあらゆる看護の努力を續けてゐる。母にしてみればこの年になつてもまだ親に心配を掛ける親の氣持に對しても石にかぢりついても必ず病魔を克復せねばならない。祖母にすれば病床に苦しむ我が子の爲に、或は幼ない孫達が無心に遊びたはむれてゐる様を見るにつけても、どうかしてきつとなほしてやらねばならない、年老いた母に看られるその子、不治の病にある子を見る、その母親私はこの祖母と母、看る者看られる者、相互の心中を思ふても腸をえじられる様な苦痛を感じずには居られなかつた。

それから三月に入ると祖母の献身的看護の甲斐もあつて母はしばらく起きて歩ける位にまでなつてゐた。祖母も安心して歸郷されたのだつた。

併しこうゆう状態も長くは續かなかつた五月の半ば頃になつて急に病勢は悪化していつた。長い病床生活は母の体をしてすっかり衰弱させ、加ふるに餘病を併發するに

鷹取山

甲賀俊男

山の端に月は残り朝行を知らず太鼓は鳴り轟くも
夕ばれの鷹取山に霧深しひぐらしの聲遠くきこるつ
雷雨は止めど流れの激しくて小砂利刎飛び草ゆすりつ
雨晴れて生桓越しに子供らが落葉の中に栗拾ふ見ゆ
兄も征き弟も召されし故里に老ひたる父のひとりぬ給ふ
鈴虫を捕へむとわが近づけば一つなき止み遠くには啼く
蟋蟀が吾が枕べに鳴きたちて久しくやめず眠れざりけり

四季の思出

中村貫一

春

ふと見れば庭のかたへにつつましく乙女椿は咲き出でにけり
草に寝て見上ぐる空の花曇り春の想のひそけさに入る
吾が庭の乙女椿はつき／＼に咲きてこぼれて春たけにけり

至つては全く力盡きて、六月二日母は静かに逝つた、私は思ひを祖母の上に馳せる。いつかはこの日の来る事を豫期してはゐたであらうけれど、實際にこの報らせを受けつつた時祖母の心痛は如何ばかりであつたらう。親が子を送らねばならない、子に先立たれた母としての云ひ知れないものに。

去年の秋、丁度二學期の試験が始まる前日だつた、山は漸く寂しさを催す頃、又しても私は祖母の死に逢つた、母を失くしたからの私はこの祖母を唯一の心の頼りともして一層親しさを感じてゐた、それだけにこの事は私にとつて大きな心の痛手であつた。自分獨り捨てられた様な、今迄もつてゐた一切の望みをも失なつてしまつた様な、暗い冷たい氣持にさせられたのだつた。

さつきから私は机の上にかざられてゐる祖母の寫眞をながめ乍ら、ありし日のやさしい哀れた祖母の面影を偲んでゐた。ひっそりした部屋の中ではたゞ時を刻む時計の

ただ一人友のたより打たえて淋しきまゝに春逝かむとす

夏

初夏のおとづれきけば白雲の湧き出づる山のこひしかりけり
むし暑き一日は暮れて山里のあちらこちらにひぐらしの鳴く

秋

亡き友よ今はいづこに在するや君と語りし秋は來たるに
こほろぎの鳴く音うれしき友ときくすぎ行く秋の夜半の一とき
秋風に木々の葉寒く散りそめてつめたく成りぬ夕暮の道

冬

何氣なく取りし夕ホルの冷たさにひとしほ寒し初冬の朝
さら／＼と雑木林に風立ちて冬の短日くれて行なり
故郷の冬田につづく雑木山楢にみゆるあはき夕月

日 記 抄

辰 巳 紫

山原に霧たちこめてこの朝け梵鐘の音ふかくこもらふ
春あさき種蒔くと我が堀る土ゆこがり出でし冬籠り虫

音のみが、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

母

久世寛瑞

「母」お母さん。」この言葉は僕にとつて
親み深く感ぜられるのである。子供が母を
呼ぶこの聲を聞く時は、僕はいつもやさし
い慈愛に満ちた母の顔を頭の中に思ひ起す
のである。世の中には西洋文明の讚美者、所
謂新しがりやが、母のことを、子供に「マ
、」と呼ばせてゐるのを聞くが、何となく
空な、そして親しみが薄い様な気がする。
やはり日本人は日本人らしく「お母さん」
と呼んだ方が遙かに親しみ深く眞實がこも
つて居ると思ふ、

世の中に母性の愛ほど偉大なものはない
その恩ほど極めて深く高いものはない。母
性愛と云ふものは人間ばかりでなく、あら
ゆる動物でさへ特に持つて居る共通した貴
いものである。どんな高貴な人でも、賤し